

椿新田の寺

春海を歩く

立秋を過ぎた干潟八万石は、見渡すかぎり黄金色に染まり実りの時をむかえました。

椿湖が干拓され工事開始から4年後の1674年から新田地が売り出されたとされています。それから20年余りの間に農民の定住も進み、1696年に地域の春海村と米持村（豊和地区）の2か村を含む新田18か村が成立しました。この時、春海村内に農地を

持つ者は椿村の91人を最多に吉崎村26人、野手村14人と続き、近隣20余か村と遠くは江戸の2人を含む209人でした。

その中に瀬戸谷（春海村）11人の記載も見られ、村の成立時に瀬戸谷集落がすでに存在していたことがわかります。春海村の家数は1713年に57軒、1814年に167軒と増えました。

1678年ごろになると、「新田三社五か寺」といわれる神社と寺院が建てられました。

春海村では水神社と修福寺がそれに当たります。

5か寺のうち修福寺など3か寺は、いずれも鉄牛禪師を開山としました。鉄牛は、1654年に中国から渡来して黄檗宗を開いた隠元の教えを受けた禅宗の僧で、椿湖干拓の功労者とされています。

この功績で幕府から寄進された土地に福聚寺（東庄町）を建て、晩年をこの寺で過ごし、1700年に亡くなり同寺に埋葬されました。

春海区の寺院は現在、無量院のみですが、先に紹介したように春海村の成立前後に吉崎村や長谷村（共興地区）から移住した者があったため、長谷・如来寺の末寺の同寺が建てられたのでしょうか。

道路をはさんで無量院の反対側の墓地に、僧侶の墓塔がありその1基に「修福創建第二代」と刻まれています。5代から7代までの墓塔もあることから、隣接して修福寺が存在したのでしょうか。しかし時代が経つにつれ維持も困難になり、廃寺になったと考えられます。

江戸時代、春海村にはこの2寺のほか、江戸の町人が建てたとみられる大通寺、福善寺が記録に見られますが、現在は墓地となっています。

修福寺跡は、椿新田の寺の歴史を伝えるよう墓地がきれいに整備されています。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

閩秘書課広報広聴班

☎73・0080



修福寺跡に建つ僧侶の墓塔